

Title	接辞性字音形態素「感」の研究
Sub Title	
Author	徐, 婷(Jo, Tei)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2017
Jtitle	日本語と日本語教育 No.45 (2017. 3) ,p.108- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20170300-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

接辞性字音形態素「感」の研究

徐 婷

本論文では、「達成感」「安心感」のような字音形態素「感」が、従来は漢語が前接するのが一般的であったが、最近では、その前接要素が語種の面でも、品詞の面でも拡大していることに注目し、「感」の高い造語力に焦点を当て、現代的な「感」はどのような役割を果たしているのかを明らかにしようとしたものである。

本論文では、字音形態素「感」について、次のように考察を進めた。まず、「感」がこれまでどのように使われてきたのかを明らかにするために、国語辞典における「感」についての記述を抽出し、「感」の前接要素について分析した。そして、「感」が前接語基と結合して合成語に添加する意味を、「物事を見たり聞いたりして起こる心の動き」と「そのもの(場)の雰囲気から受ける、ある種の判断を伴った印象」の二つに分類し、判断の基準にした。続いて、BCCWJから「感」を伴う語を抽出し、前接要素の意味を語種別にまとめた。BCCWJより抽出した「感」を含む合成語の用例から意味分布を見た結果、従来の用法では「感」の前接する語基は、抽象的な概念を表す例がほとんどで、しかも漢語のサ変動詞になるものが多く、現在しばしば使われる「空気感」「もちもち感」などの具体的な事物を表す語、副詞などは前接要素としないことが明らかになった。

こうした「感」の拡張用法が現れる例を見ると、オノマトペを含む副詞が前接要素として「感」と結合する表現も多く使われるようになってきている。また、拡張用法には、「終わった感」のように、句を前接要素とする例も見られることはよく知られているが、句を前接要素とする場合、実際の発音では「感」の直前に小さなポーズがあって、「カㇿン」のようなアクセントになることも考えられる。こうした句を前接要素とする場合は、文字情報だけでは従来の用法か拡張用法かについての判断が難しいため、音声データで直接確認できるものと、文字データしかないものを分けてそれぞれの表現について分析した。

「感」がなぜここまで多用されているのかについては、「～ような」「～みたいな」と同じような婉曲用法を作りやすい、「すでに終わった感じがする」のような文を「終わった感」として圧縮することができる、などの仮説を立てた。しかし、いまなお変化を続ける「感」の全てを説明するにはまだ難しく、これからも「感」がどのような変化をしていくのかを見守っていきたくて考えている。